



第 38 号

編集発行／碧南市

哲学たいけん村

無我苑

所在地／碧南市坂口町 3-100

〒447-0087 : TEL. 0566-41-8522

: FAX. 0566-41-7761

梅原猛名誉村長寄稿 「徳川家康の偉大さ」

最近、徳川家康への評価が高まっている。私は仙台で生まれたが、実母が亡くなったため、父の兄であり、知多郡南端の内海町(現南知多町大字内海字馬場)で味噌・醤油醸造業を営み、町長をも務めていた梅原半兵衛と俊(とし)夫婦の下で育てられ、大学まで進むことができた。知多郡は徳川家の直轄領であつたので、徳川家に敬愛の念をもたねばならないはずなのに、梅原家は関ヶ原の戦いの落武者の子孫であることもあり、家康嫌い、秀吉びいきであつた。

家康は日本人の多くに「狸おやじ」、腹黒い悪党というイメージをもたれているが、それは、二百五十年にわたるみことな平和の世を築いた徳川家の統治する政権を天皇を担いで倒すという革命を成功させた薩摩・長州の広めた説であらう。

ところが私の妻ふさは現西尾市中畑町の生まれである。三河では家康に対する思慕が強く、「忠臣蔵」の敵役のモデルとなつた吉良上野介の領地であつた吉良吉田では最近まで、江戸幕府批判の含意をもつ「忠臣蔵」の町内での上演が禁じられていたという。他所では考えられないことである。地元では、吉良上野介は大

変情け深く、仁政を布いた名君として慕われている。

「菅原伝授手習鑑」「義経千本桜」「仮名手本忠臣蔵」の歌舞伎三大名作は、豊臣氏に対する追慕の念が強く残る大阪で生まれた作品である。それらは二代目竹田出雲や三好松洛らの合作とされているが、その創作の中心に並木宗輔がいたことは多くの研究者がほぼ一致して認めるところである。

並木宗輔は、ひよつとしたら私の先祖と同様に西軍の落武者の子孫であつたのかもしれない。この三大名作はいずれも権力者の横暴をこっぴどく批判し、その横暴に苦しむ人間の悲しみを巧みに描いている。たとえば「仮名手本忠臣蔵」は將軍綱吉の時代に起こつた事件を題材にしているが、その時代設定を室町時代に置き換え、幕府批判をカモフラージュしているのであらう。江戸幕府も、一種のガス抜きとして、主として大阪での「忠臣蔵」の上演を認めていたのであらう。このような点にも幕府の腹の太い巧みな統治が認められよう。

日本は平安時代に三百年、江戸時代に二百五十年にわたる平和があつた。特に

江戸時代の平和は甚だ重要である。江戸幕府が行つた鎖国により、ヨーロッパ諸国がキリスト教の布教を名目に日本を侵略するのを防ぐことができた。しかも、侵略される危険の少ないオランダには長崎の出島にかぎつて貿易を許可し、ヨーロッパの物質文化及び精神文化をみごとに吸収していったのである。

このような時代の基礎を築いた家康は、世界的にみても卓越した政治家であるといわねばならない。彼は信長や秀吉とは違つて海外への進出を決して試みず、朝鮮通信使の招聘など平和的な国際交流を深めたのである。

明らかに石田軍の足輕の血統をもつ私は最近、尾張人でありながら、だんだん家康が好きになつてきた。今や家康は、聖徳太子などとともに私のもつとも尊敬する人物になりつつある。この点でも、徳川様に対する深い敬愛の念に満ちた三河出身の妻に負けたといわねばならない。

天性の風来坊である私は、良妻賢母を絵に描いたような妻に対して人格の面で常に引け目を感じている。家康に対する畏敬の念においても、三河人の妻に譲らざるを得ないのはまことに残念である。

観月の会

◆出演◆
劉一(リユー・イー)氏

平成二十八年九月十七日、哲学たいけん村無我苑研修道場にて、「観月の会」を開催しました。今回は、笛の貴公子と名高く、日本と中国を中心に活動する中国笛演奏家の劉一氏をお迎えして、「荒城の月」、「十五夜の月」、「蘇州夜曲」など秋の夜長にふさわしい曲を演奏していただきました。

当日は不安定な天候が予想されたため、あいにく研修道場での開催となりましたが、豊かな中国笛の音色に引き込まれ心が癒されました。また、中国笛と日本の笛の違いや中国笛の歴史などについても触れることができました。



劉一氏プロフィール



上海出身。一九八九年上海音楽学院付属小学校笛専攻に入學。その後、上海音楽学院付属中学校から大学笛専攻に進学し、二〇〇一年優秀な成績で飛び級で卒業。同年上海民族楽団の試験に合格。笛首席として世界における活動を開始。故中国人間国宝笛演奏家の俞逊允先生の一弟子として国内外の笛界で名を知られ、今まで世界二十か国でソロコンサートやオペラに出演した。

二〇一四年四月から愛知大学博士後期課程に入學し、現在日本と中国両国で学問の世界を探索しながらその確実の演奏力で古典と現代を超えた新たなジャンルで両国において演奏活動を行い、笛の貴公子と言われるほど高い人気を集めている。

新春コンサート

◆出演◆
和太鼓龍桜流 龍桜朱泉社中

平成二十九年一月七日、哲学たいけん村無我苑研修道場にて、「新春コンサート」を開催しました。和太鼓や篠笛の演奏からはじまり、北海道の民謡であるソーラン節、唄にあわせて踊りすだれを変化させる南京玉すだれの披露がありました。最後には獅子舞を披露して、参加者の頭を噛んで回り、参加者からは大きな拍手が沸き起こりました。また、会場には十二月まで開催していた正月飾り作り教室の受講者が製作した作品が並び、会場はより華やかな雰囲気でした。新春の無我苑開きにふさわしい、素晴らしいコンサートとなりました。

和太鼓龍桜流二代目会主、太鼓指導者を意味する女流太鼓師を肩書とする。龍桜流十二道場をはじめとして、和太鼓指導者として後進の指導にあたる。曲打ち太鼓「龍桜流やぐら太鼓」の多彩なリズムと技を自在に操り、女性ならではのしなやかで美しい太鼓、音楽性と芸能性を融合させた独創的な演奏技法に高い評価があり、カリスマ太鼓師として和太鼓界に新しい風を吹き込む。

これまでに豊田市文化財保護審議会委員や豊田市文化振興財団評議員を歴任するなど、民俗芸能・民間伝承芸能への造詣が深い。また、地元には伝わる神楽や祭り囃子、全国各地のお囃子や踊り、大道芸にも通じ、和太鼓とこれら伝統芸能をモチーフとして幅広い公演活動を行っている。

和太鼓龍桜流二代目会主、太鼓指導者を意味する女流太鼓師を肩書とする。龍桜流十二道場をはじめとして、和太鼓指導者として後進の指導にあたる。曲打ち太鼓「龍桜流やぐら太鼓」の多彩なリズムと技を自在に操り、女性ならではのしなやかで美しい太鼓、音楽性と芸能性を融合させた独創的な演奏技法に高い評価があり、カリスマ太鼓師として和太鼓界に新しい風を吹き込む。

龍桜朱泉氏プロフィール





「ストッキング自由自在」

会期 平成 28 年 8 月 3 日～10 月 2 日

白いストッキングを染色して、丸みを帯びたつま先やゴムが入ったウエストなどのストッキングの部位ごとの特性を生かし、自由自在で枠にとられない独自の世界を表現しました。

ストッキングを針金に巻きつけるなどして立体的に表現して、展示室でひときわ存在感を示した「ヒューマン」をはじめとして、人間の動き、人と関わりのある情景を表現した作品を中心に展示されました。

光
富
さ
よ
展

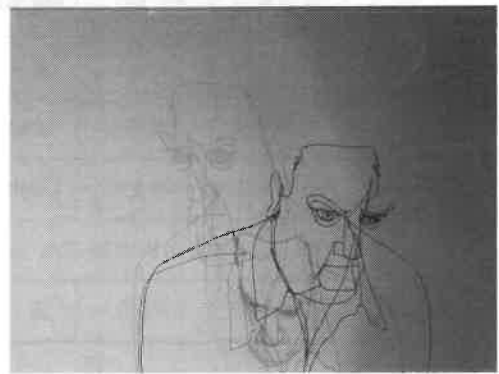
水
谷
一
子
展

「FAVORITISM[XIX@]存 son」

会期 平成 28 年 10 月 8 日～12 月 4 日

針金による「線」を使ってできている立体作品は、見る角度によって表情や作品の見え方が変わります。

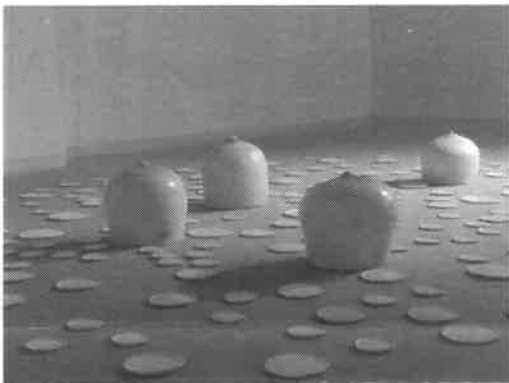
そして、ペンライトで作品に光を当てることで、浮かび上がる影もまた作品です。また、光の当て方や見る位置を変えることで別の影が姿を現します。無限の影の作品ができあがり、光を動かすことで影が動いているようにも見えます。線、光、影がおりなす魅惑のワイヤーアートを堪能していただきました。



「そこに存在すること」

会期 平成 28 年 12 月 8 日～

平成 29 年 2 月 5 日



今回の展示は、好奇心から経験するすべてのものから生まれ、人々と共感し、繋がっていきたいという杉本さんの思いが込められています。

展示室に白い陶器をちりばめた「白い土の花」をはじめ、純粹、無垢な色として杉本さんが捉える白い色の白化粧土を使ってプリミティブ(原始的)でシンプルな作品が展示されました。

杉
本
た
け
子
展

開催中

「鳥谷浩祐展」
記憶の時間を行き来する
「イツデモモデル?」



- 料 金 無料
 - 場 所 哲学たいけん村無我苑 瞑想回廊
 - 休 苑 日 月曜日
 - 時 間 午前九時から午後五時まで
 - 会 期 四月九日(日)まで
 - セカイをご覧下さい。
- 画家・鳥谷浩祐氏の展示を開催中です。日々描き留められた日記ともとれる作品の表面には言葉とも絵ともとれる独特の世界観を見ることが出来ます。作者が日常から汲み取る繊細な表現、美しい青のセカイをご覧下さい。

平成29年度涛々庵茶会・三曲定期演奏予定表

月 日	涛々庵茶会		三曲演奏出演団体
	席主	流派	
4月23日	杉浦 伸子 (宗伸)	裏千家	尺八 川村柔山グループ
5月28日	小笠原芙美 (宗文)	久田流	鈴木祥子社中
6月25日	鈴木なみ江 (宗江)	裏千家	絲音の会
7月23日	神谷美枝子 (宗美)	表千家	若草会
8月27日	澤田 教子 (宗教)	表千家	神宮弘美社中
9月24日	永井いく子 (宗郁)	裏千家	鈴木祥子社中
10月22日	藤原知香子 (宗知)	裏千家	絲音の会
11月26日	小林ミサ子 (宗実)	裏千家	山本加代子社中
12月17日	杉浦 時子 (宗時)	宗偏流	鈴木祥子社中
平成30年 1月28日	小笠原芙美 (宗文)	久田流	絲音の会
2月25日	碧南文化協会茶道部		尺八 川村柔山グループ
3月25日	杉浦みどり (宗翠)	裏千家	若草会

涛々庵茶会・三曲定期演奏

涛々庵茶会は無我苑の市民茶室涛々庵(とうとうあん)を使用した市民茶会です。毎月席主によってそれぞれに創意工夫がなされ、華やかな茶会となっています。また、茶会に華を添える箏、三弦、尺八による三曲の定期演奏も研修道場安吾館にて行っています。

平成二十九年度の涛々庵茶会は、毎月第四日曜日に開催します。ただし、十二月は第三日曜日に開催します。

料金は一服四百円、時間は各日とも十時から十五時まで(立礼茶席は十六時まで)です。三曲の演奏は十時から十五時まで随時観覧無料で行っています。

お茶会の作法についてご存知ない方もお気軽にご参加いただけます。また、三曲の演奏はお茶会に参加しない方もお聞きいただくことができます。是非、一度涛々庵茶会の雰囲気をお楽しみください。

伊藤証信の遺品

伊藤証信自筆書 掛け軸



「自己の運命を全く他の愛にまかせ同時に全力を献げて他を愛する之を無我愛の活動といふ 紀元二千六百年秋 証信」

二十七歳の証信は帰省した時、ふと「無我愛」の靈感に打たれる。ここに書かれたある言葉は、その時に得た彼の根本思想である「無我愛」とは何かを端的に表したものである。

行き場のない憂鬱

明治三十三年(一九〇〇)、証信は自身の信仰の確立が出来ないまま真宗大学本科を卒業し、研究科に進み、一年が過ぎた頃に、ある格式の高い寺の一人娘との縁談の話が持ち上がりました。ところが結局破談になってしまいました。家でも嫁いだ妹が実家に帰ってきたりするなど悪いことが続きました。大学でもごたごたが起こり、学長の清沢満之が辞任するなど証信は仏教界に対しても情熱を失いかけていました。まさに行き場のない憂鬱にみまわられていたのです。

無我愛の靈感

明治三十七年、そんな思いの中で東京の巣鴨に下宿していた証信は父の病気のためにトルストイの本を一冊携え帰省し

ました。八月二十七日の夜、父と一つ蚊帳の中で、「自分はどうしたらいいんだ?」という思いにさいなまれ、夢とうつつの間をさまよっていました。そのときの境地を、伊藤証信物語の一節に次のように書かれています。

「我が人生は、ただ自然の掌の中にあり、名誉も不名誉も功績も我が責任に非ず。全て他の支配にあり。ただ、天から求められて職を勤め、目の前の自然人類を愛するのみ」

活動としての「無我愛」

「自分はどうしたらいいんだ?」という憂鬱をいつも抱いていた証信は、この靈感を得たとき、全身に電流が流れたようにぐったりとなり、甘い涙が泉のように流れたといえます。何事も自分の力のみで解決しようとしていた高慢で強情な自分がはがれ落ちていくような気分になったのでしよう。仏教の悟りから言えば、他力の境地を得た安楽の世界であろうと思われます。ただ証信の「無我愛」は、己の無我から得られた安楽のもう一歩先を会得したのです。つまり「無我愛」には、無我になった自分が他を全力で「愛する」ことで、より深い無上の安楽を得るという「活動」が含まれているのです。

昭和十五年(一九四〇)に書かれたこの証信の揮毫は、そんな彼の根本思想を短い言葉で表した貴重な書であると思われます。

碧南市史資料調査員

浅井久夫